

令和2年度 大学生事業報告書



令和3年2月28日

東北文化学園大学 エコ・カフェ稜川

1. 問題の所在 —明らかにすべき課題—

私たちエコ・カフェ稜川は、平成30年度・令和元年度「大学生の力を活用した集落復興支援事業」において、「後東若連」が継承する祭祀「あばれ山車」に針道九区集落の特性を見出し、高度の養蚕技術に基づく鉄砲糸ブランドで米国市場への生糸輸出を担った起業家精神を検出しようと試みた。しかし、具体的な地域振興策を提案することはできなかった。そのため、今年度（令和2年度）は地域振興策の作成に取り組むことになった。

だが、話し合いを重ねてきた活動計画（案）は新型コロナウイルスの感染拡大によって大幅な変更を余儀なくされた。令和元年10月13日、台風19号直後にも開催された「あばれ山車」が中止され、起業家精神の継承という仮説の根拠となるはずであった諏訪神社の例大祭、口太山山開き、暑気払い等の集落行事はことごとく自粛されることになった¹。

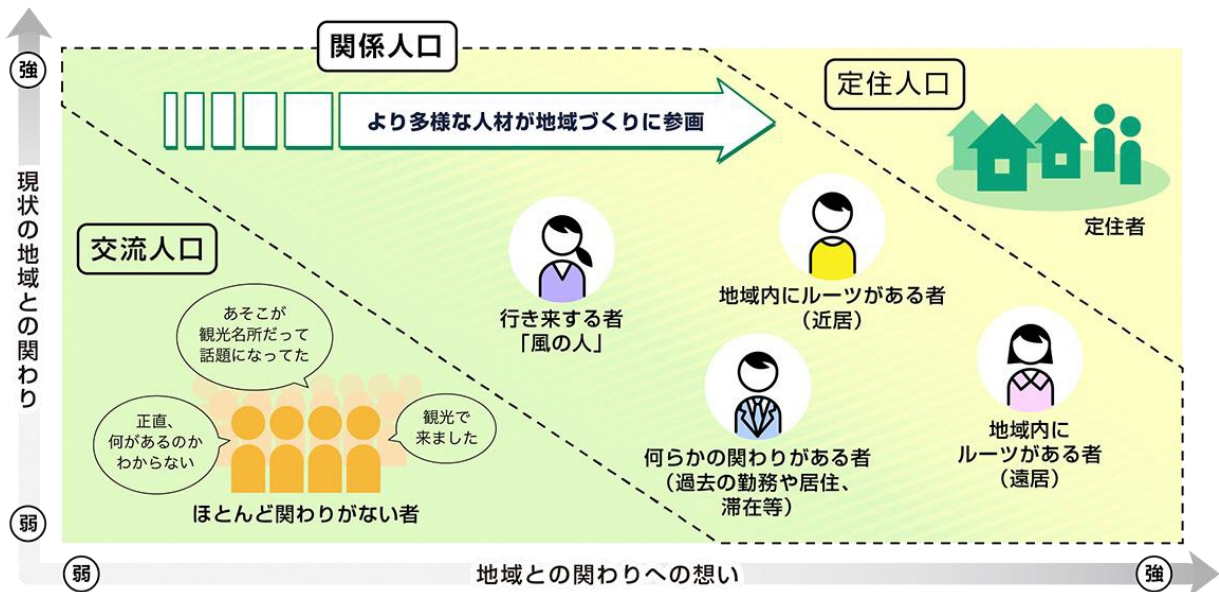
都市圏の問題は顕示的だが、感染実態の希薄な農山村地域も従来の靱帯を維持してきた濃密な人間関係の抑制によって打撃を受ける。その状況下、大学生事業に取り組む私たちはその状況²を文化の継承を可能にする文明の課題と考えた。すなわち、「あばれ山車」など針道九区に継承される伝統的文化の意義や価値を実感させていただいた私たちは、自らが体験した遠隔授業を支える情報技術等を通し、現代文明に適応しうる新たな農山村文化のあり方を考え、激甚災害やパンデミック等のネガティブ・インパクトに抗して集落を維持しうる智慧や手段を地域振興策として提案すべきであると考えた。

¹ 針道九区集落では神事として「後東若連」が家内安全の花飾り（あばれ山車に使う）を作り、各家庭（諏訪神社の氏子）に配布した（今井良二さんからの聞き取り）。

² パンデミックや気候変動関連の激甚災害等は人類と自然との関係性をめぐる現象の一つであり、農業革命や産業革命と同様に人類史における転換指標と考えられる。

2. 関係人口について

本報告書における「関係」は「さまざまな方法で地域に関わる」ことを意味し、人口減少や高齢化から生じる担い手不足の問題を「変化を生み出す」人たちが地域と関わることで解決して行くという明るい展望を総務省[2017]と共有している。【図 2-1】



【図 2-1】 総務省による「関係人口」のイメージ（出典は総務省ホームページ）

島根大学の作野[2019]は関係人口論の源流を①高橋[2016]、②指出[2016]、③田中[2017]に求め、④総務省[2017]はそれらを承けた政府の公式見解とし、①～③と④の間には本質的な相違があるとしている。作野[2019]は、それを「交流人口と定住人口の間に位置する第3の人口」と捉える認識方法から生まれる「段階性」という「誤解」（誤謬）である、と温和な表現を用いて指摘している。しかし、「都市農村交流」が経済成長過程で生じた居住人口の偏在（過密と過疎）を背景に提起された第四次全国総合開発を淵源とし、地方経済活性化による財政改革を目指す「定住」補完策であった点を想起すれば明らかのように、来訪者や宿泊者等の数値指標による計測可能性で同質性を担保する行政視点からの「関係人口」は、経済優先の価値観に基づく「第3の人口」の位置づけによって首尾一貫性を堅持しうる。したがって、作野の指摘する誤謬とは、「関係人口」が「交流人口」から「定住人口」への過渡的形態にすぎないという皮相な理解に対する批判を意図したものと考えられる。その文脈から類型化による総務省[2017]の再定義を試みた作野[2019]が、①買い物や病院の送迎、②除草や水路掃除等の農作業支援、③祭事や消防団活動等の地域維持活動等の居住者視点から「地域の課題を十分に意識し、当該地域の生活を守っていこうとする姿勢が強い」「非居住地域維持型³」に着目し、都市に暮らしながら農村の現状を理解できる人々が「実質的に地域自治を担っていく主体になる地域も現れてくる」とした点は「関係人口」の実効性を担保する修正であると考えられる。換言すれば、都市住民の視点に立ちながら地域活動に参加しつつ（守備）、地域の変革を通して地域に貢献する（攻撃）、攻守のバランスを調整

³ 他出しても地域の文化や伝統の維持に強い関心を持つ典型的人間像を、「あばれ山車」の準備のために帰省する針道の他出若連（「非居住地域維持型」）に見ることができる。

(両立) できるユーティリティ・プレイヤー待望論であると考えられる。

以上、「関係人口」概念の議論に拘泥しすぎたが、私たち「エコ・カフェ萩川」の活動にしても、「山里の家」を経営する今井知子さん、「今井公園」の開設・管理者の今井之博さん、「あばれ山車」私設応援団長の今井良二さん、鶏耕（チキントラクター）の実証試験に協力いただいた斎藤康正さん（前区長）、学園祭「マルシェ針道⁴」開催を支援いただいた方々を初めとする針道九区集落、二本松市役所、福島県庁、道の駅ふくしま東和、ふくしま農家夢ワイン等との関係性において成立しえたものであり、その関係性のキーパーソンとしての宗形常夫さん⁵（元区長）の存在が不可欠であった点は明らかであった。

作野[2019]が「関係人口」論の源流に位置付ける指出[2016]らの考え方が総務省[2017]の考え方と明らかに異なる点として、例えば、指出[2016]は2008年に島根県海士町で「株式会社巡の環^{めぐり}」を設立した阿部裕志さんの言葉を借り、地域の人を巻き込める要素として、①「儲かるか」、②「面白いか」の二つだとわかりやすく説明し⁶（p.142）、高橋[2016]は、体内に環境（自然）を通過させる「食べる行為」を自然との接点とし、自然との一体感を回復する機会を都市住民に提供する「食べる通信」運動に取り組み（p.101-102）、地元島根の地域おこしのために新聞社を辞めて大学院に通い始めた田中[2017]は、自分が「関係人口」づくりに必要だと考えた「関係案内所」に取り組むために島根県主催の「しまコトアカデミー」に参加し、2017年までに6期83人の受講者を支援している⁷。（p.67）

3. 2020年度の大学生事業活動について

（1）初回の訪問（2020年8月1日～2日）

コロナ禍で迷走していた私たちに、「即座に結果の出る短距離走ではない」地域づくりについて再考してほしいという厚意からであろう、二本松駅まで迎えに来てくれた宗形さんは最初の訪問先に「東和マラソン」の出発地点を選んでくれた。前途を暗示するかのように繁茂する「高林寺」（「あじさい寺」）境内のセピア色に変色した紫陽花は、長距離走者がスタート前に抱く緊張感にも似た思いを迫るものであった。

2018年8月、「羽山」の山頂を目指していた私たちは確かに山麓に広がるリンゴ園を見ていたはずであるが、事前に「針道九区にリンゴ農家はいない」という説明を聞いたためか、それは漠然と広がる風景の一部にすぎなかった。その「羽山りんご」への思いは3つの理由（①オーナー制のリンゴ園計画。②「あばれ山車」の自粛。③羽山りんごのシードル）から劇的に変化した。私たちは「あばれ山車」制作を「起業家精神」の表現と捉え、

⁴ 学園祭で桑の葉茶と桑の実ジャムの試飲・販売、地元PRを実施（2019年10月19、20日）。

⁵ 集落の田畑を耕作する元区長の宗形さんは、いわば「超非居住地域維持型」といえる。

⁶ 「巡の環」の事業を通して「関係人口」を育てようとする阿部さんの方法は「関係人口」自体の理解にも役立つだろう。すなわち、「島まるごと学校に」というコンセプトの田舎ベンチャー「巡の環」は、海士町の振興計画をつくる①「地域づくり事業」、企業や自治体等の研修を行う②「教育事業」、海士町の特産物を販売し、魅力を発信する③「メディア事業」という3部門から構成され、2015年度の事業収益構成は、①40%、②45%、③15%であった。（pp.153-155）

⁷ 5期までの受講者を対象にした2016年時点のアンケート結果（回収率82.5%）によれば、「島根に関わる活動をしている」という回答が58.8%、「首都圏で活動している」は33.3%、「島根に移住し、活動している」は25.5%であり、首都圏で活動している33.3%が「関係人口」とされている。（p.77）

それを遊休桑園の活用に結びつける観光開発を考えていたが、「羽山りんご」については、品種特性や栽培技術等の基本事項を含めた情報が不足していた。そのため、宗形さんの知人であり、羽山南麓でリンゴを栽培している本多雅彦さんを紹介してもらうことになった。

リンゴの直販を中心とする家族経営に取り組んでいる本多さんによれば、養蚕や煙草を主要な作物にしていた旧東和町戸沢にリンゴが普及したのは1970年代以降であるという。養蚕から林檎への転換の技術的障壁は比較的 low⁸、その普及に関しては標高や労働市場等の立地条件が影響したと推測される。また、戸沢・岩代にリンゴ栽培が普及する過程で、1960年代から栽培試行を重ねた武藤嘉さん⁹の存在が大きいと考えられる。【図 3-1】



【図 3-1】武藤 嘉翁 顕彰碑

次に、羽山リンゴのつながりで「ふくしま農家の夢ワイン」を訪問させていただいた。「夢ワイン」は羽山リンゴからシードルを醸造している。また、羽山山麓で育つ「ヤマ・ソーヴィニオン」は JR 東日本の豪華寝台列車「四季島」のランチワインに採用された夢ワインの「一慶」となる。震災後に地元農家が起業した夢ワインは共同稚蚕飼育所を地元産ブドウのワイナリーに転用した施設である。醸造所を見学し、ワイン製造過程に関するヒアリングを実施したが、ブドウ収穫前とあって建屋内は醸造機器だけが並んでいた。【図 3-2】

しかし、ブドウ収穫の開始後における醸造タンクからの発酵音や騒々しく鳴り響く瓶詰作業の打突音を容易に想像できる醸造所は臨場感に溢れていた。ブドウ品質の維持・管理や後継世代への技術継承に関する諸課題、コロナ禍で急浮上した販売問題について説明する田口知江さんの言葉からは農家によるワイナリー運営の難しさがリアルに伝わってきた。

⁸ 村上[2007]によれば、養蚕業は農業（桑栽培）、畜産業（蚕飼養）、林業（桑樹管理）に加え、工業（上蔭・収繭・毛羽取等の機器開発利用）や商業（生糸の流通・取引）複合的性格を持ち、その後の商工業発展の基盤になったと考えられる。

⁹ 共同選果場近くに顕彰碑が建立されている。碑文から羽山りんご史を読み取ろうと試みたが、石碑背面に刻まれた碑文は不鮮明で読み取ることはできなかった。



【図 3-2】ブドウ収穫前の醸造所内の状況

道の駅「さくらの郷」には独自の雰囲気がある。地元産野菜が並ぶ売り場の設計は「ふくしま東和」と変わらないが、レジ後方にりんご果汁 100%のジュース「ほっぺくん」のポスターが掲げられ、冷蔵陳列棚には関元弘さん（ななくさ農園主）の「ナノブルワリー」が醸造した「ななくさビーヤ」（発泡酒）が並んでいた。【図 3-3】、【図 3-4】



【図 3-3】「道の駅さくらの郷」の店舗



【図 3-4】「ほっぺくん」のポスター

「さくらの郷」でピザ生地を購入すると、石窯で焼いてもらえるというオマケが付く。「焼きたてピザ」が美味しいのはいうまでもない。但し、「石窯焼き」は日曜・祝祭日のみの限定サービスである。その意味で、私たちは実に幸運であった。【図 3-5】、【図 3-6】



【図 3-5】ピザ用の石窯

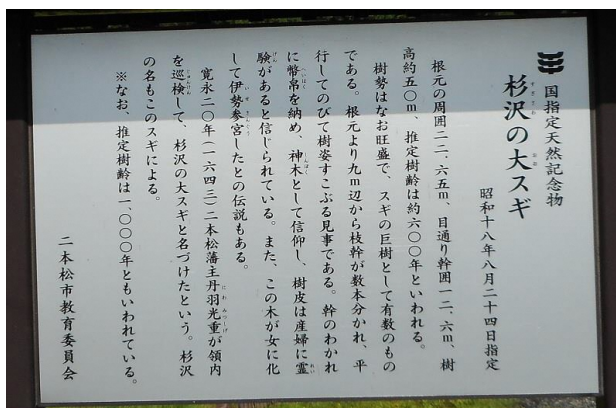


【図 3-6】焼きたての石窯ピザ

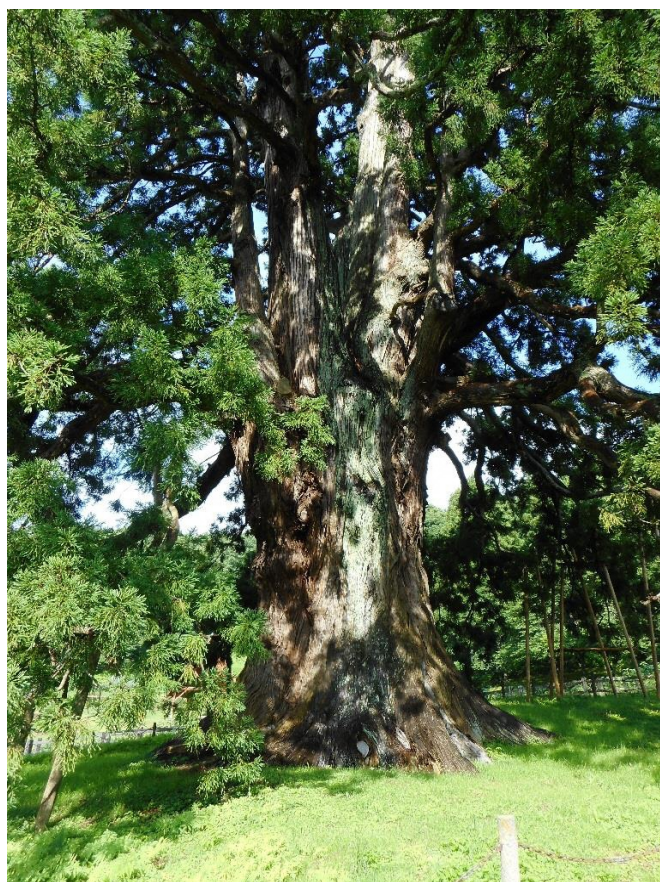
「杉沢の大杉」(根元周囲 20m 超, 樹齡 600 年)には驚かされ, 圧倒された。【図 3-7】、【図 3-8】、【図 3-9】 針道を含む東和地域を歩くと刹那的で実在感に乏しい都市的時間とは対極的な悠久の時¹⁰の流れを感じる。19 世紀の米国を生きたソロー[1995]はウォールデン湖畔での生活を通して「それまでの時間の経過が単なる幻想にすぎなかった」と実感し、「東洋人の言う瞑想とか, 無為という言葉の意味を悟った」わけだが, 東和にはソローの「実感」を追体験できる「聖地」が少なくない。



【図 3-7】 杉沢の大杉の石碑



【図 3-8】 「杉沢の大杉」の説明



【図 3-10】 「杉沢の大杉」: 巨大杉の威容から感じるものは見る人によって異なる。私たちが感じたのはこの大杉を育んだ歴史的時間と自然の豊かさであった。

¹⁰ 「東和」を転じて「永遠」時間とでも呼ぶべきかもしれない。

2019年5月に私たちが山開きの行事を体験した針道の里山「口太山」には、共同炊事場や宿泊棟を利用してアウトドア・ライフを楽しむことができる「夏無沼自然公園」エリア内の野外キャンプ場が存在する。【図 3-11】、【図 3-12】、【図 3-13】、【図 3-14】



【図 3-11】 キャンプ場の概観



【図 3-12】 共同炊事場と宿泊棟(バンガロー)



【図 3-13】 宿泊棟は3棟並んでいる



【図 3-14】 室内の両側は二段ベッド

(2) 第2回の訪問 (2020年9月8日～9日)

傾斜地が多く獣害も深刻な中山間地は条件不利地といわれる。しかし、その条件の下で「起業家精神」を発揮する経営体が存在している。その事実を認識したのは大学生事業の参加から2年を経たからのことだった。COVID-19の感染拡大がもたらした与件の変化によって「思い込み」の壁が崩れるまで、その現実を認識することができなかった¹¹。

その経営体(大野農園)は、①稲作での作業受託や酒米の契約栽培、②露地野菜(販売用キュウリ・ネギ, 自家消費野菜)、③施設野菜(ミニトマトの契約栽培)を中心として、④畜産(エミュー)、⑤林業(間伐などによる森林保全)、⑥農家民宿などを組み合わせた複合経営によって、⑦地域雇用(通年のパート, 繁忙期の臨時雇用)を創出し、⑧優れた農業研修(基礎+専門教育)を通して約20名の新規就農者を育成(自立支援)してきた¹²。

2020年9月8日, ミニトマト(ハウス栽培)の収穫体験をさせていただき, 自然の中で問題を解決するために知恵と技術を磨き, 自然資本を活用するビジネスモデルの可能性が実感できた。大野農園は地元素材を活用した有機質肥料を使い化学合成農薬不使用だが, 有機認証は取得していない。それはC.J.フィッツモーリス[2018]と同じ理由によるものでは

¹¹ 住居を変えても集落は変わらないこともあるという慣行を知らず, 針道九区に専業農家が存在しないと思いついていたために生じた事実誤認であった。

¹² その信憑性に興味を持つ方は, ぜひとも大野農園を訪れ, 農作業を体験し, 農家民宿に宿泊しながら, 正否を直接確かめていただきたい。

ないだろうか。つまり，消費者向けの認証制度は気象変化や生態系の多様性に対する独自の適応技術を十分に評価しえないという限界があり，自然との交流から学ぶ農業技術の研鑽を信条とする大野農園の経営理念にはそぐわない。例えば，20年以上もミニトマトを連作する大野農園の施設内には病原性細菌の感染爆発を制御する拮抗微生物のフローラを培養する生物学的仕組みが成立していると推測される。しかし，それを現在の認証制度の枠組みの中で表現（表示）することは不可能に近いと考えられる。【図 3-15】，【図 3-16】



【図 3-15】ミニトマトのハウス(福島県提供)



【図 3-16】作業体験の成果(福島県供)

(3) 第3回の訪問 (2020年9月12日～13日)

エコ・カフェ秋川の曾根君と平塚君が農作業を体験するオリジナル・ツアーを企画して古民家を改装した農家民宿「ゆんた」に宿泊し¹³，仙台にはない「のんびりと寛げる空間」を満喫してきた。隠元マメ，茄子，ミニトマト等の自家製野菜中心の超ヘルシー夕食を味わい，宿主の仲里忍さん（沖縄県八重山出身）が沖縄弁で語る農家民宿開設に至るまでのさまざまな経験を聞き，大学の講義からだけでは学べない多くのことを学ぶことができたという¹⁴。

【図 3-17】，【図 3-18】，【図 3-19】，【図 3-20】【図 3-21】，【図 3-22】



【図 3-17】ゆんたの外観(平塚航太撮影)



【図 3-18】ゆんたの玄関(平塚航太撮影)

¹³ コロナの影響で宿泊予約に難儀する中，受け入れていただき有難うございました。

¹⁴ 「農家民宿ツーリング」に仲里さんが登場する「ゆんた」の動画がアップされている。



【図 3-19】 ゆんたのテラス(平塚航太撮影)



【図 3-20】 ゆんたの屋根裏(曾根祐聖撮影)



【図 3-21】 ゆんたの上り框 (曾根祐聖撮影)



【図 3-22】 ゆんたの夕食(曾根祐聖撮影)

翌日、長靴と雨合羽を準備して「四季島」ランチワイン「一慶」の醸造元に向かった二人の収穫作業はコンテナ何ケース分もの収穫となった。苦労話も聞かされたが、AI活用型の鳥獣害防除システムの開発を議論する曾根君と平塚君にとって、葡萄収穫作業を通して醸造過程の一端を体験できたことは有意義であったと考えられる。【図 3-23】、【図 3-24】



【図 3-23】 ブドウ園の風景(曾根祐聖撮影)



【図 3-24】 収穫されたブドウ(曾根祐聖撮影)

(4) 第4回の訪問 (2020年10月24日~25日)

初回訪問時に見ることができなかった羽山のリンゴ園を間近で観察するため、リンゴが育つ土壌(根圏)とリンゴの木の健康を気遣いながら、観光農園「マルカリんご園」と農家民宿「くまさん」を経営する熊谷耕一さん¹⁵を訪問した。「マルカリんご園」では科学的なオーガニック農法といえる「バイオダイナミック農法」を導入している。農薬や化学肥料の不使用は同じだが、圃場環境だけでなく周辺の生態系との調和にも配慮している点が通常のオーガニックとは一味違う。傾斜地に点在する林檎園では複数の接木方法が試されていた。新技術に挑戦する姿勢、剪定の行き届いた樹枝からリンゴ栽培への熱い思いが伝わった。「虫や鳥が食べるリンゴは完熟している証拠」と言いながら、鳥たちが食べ残したリンゴをおいしそうに頬張る熊谷さんの姿は印象的だった。農業は愛のある人が取り組む活動だと改めて再認識させられた。【図 3-33】、【図 3-34】、【図 3-35】、【図 3-36】



【図 3-33】リンゴを手にする熊谷さん



【図 3-34】マルカリんご園の事務所



【図 3-35】マルカの事務所兼出荷場



【図 3-36】隣接する耕作放棄地

羽山のおいしい空気を葉から吸い込み、根圏を通して豊かな栄養分を土壌から取り込み、元気いっぱい生長した「マルカリんご園」の林檎果実とりんごジュース「ほっぺくん」を入手した私たちエコ・カフェ萩川は学内施設で試食会を開催した。医療福祉の現場で活躍

¹⁵ 熊谷耕一さん、大野達弘さん、武藤一夫さんは「道の駅ふくしま東和」やNPO「ゆうきの里東和 ふるさとづくり協議会」の運営にかかわってきた地域のリーダーである。

する未来の専門家を育てる本学には「調理実習室」が設置されており、経済学や経営学を学ぶ総合政策学部の学生たちも当該施設を利用できるのである。【図 3-37】、【図 3-38】



【図 3-37】 羽山リンゴの食味試験風景①



【図 3-38】 羽山リンゴの食味試験風景②

以下に示したように、参加した学生の食味試験結果は概ね好評であった。【表 3-1】

「羽山りんご」(つがる)の食味試験結果(2020年10月29日) 抜粋	
G	感想
1	さっぱりとした味わいで、とても食べやすかった。
1	甘くてシャキシャキ感があり、また食べたいと思いました。
1	とても甘くてみずみずしく食べやすいりんごだと感じました。また食べてみたいです。
2	思っていた以上に甘かった。梨との違いを感じた。
2	いつも食べているリンゴよりも甘くて瑞々しく、シャキシャキとした歯ごたえが良かった。
2	すごく美味しいりんごでした。また食べたいです。
3	とても甘くて熟しているけど、食感もしっかりあってとてもおいしかったです。
3	甘味があって、みずみずしくおいしかったです。歯ごたえもよく食べごたえがありました。
3	とてもおいしいリンゴでした。また食べたいです。
4	水分があっておいしかったです。
4	とてもおいしかったです。家でりんごのむき方の練習します。
4	新鮮でみずみずしく、とてもおいしかったです。
5	美味、料理を覚えたい
5	おいしかったです。
5	皮付きで食べてもとても甘くおいしかったです。食感が良い！

【表 3-1】 羽山りんごに関する学生の食味試験結果

註) 表中「G」は、参加者(パネル)15名を5グループに分けた際のグループ番号を示す。

大野さんに尋ねた NOKO 1 号¹⁶の単収はコシヒカリやヒトメボレよりも低い7俵/10a¹⁷、「大粒種のために薄播きとなり分蘖を十分に確保できなかった」点が減収要因ということで、(播種機問題を解決できる)直播を試したいという抱負を聞いた。直播の場合は発芽・苗立を含む初期生育に影響する水田除草が課題になると考えられる。圃場の生態系を活用するさまざまな知恵と技術を持つ大野さんの新たな挑戦に期待したい。【図 3-25】、【図 3-26】

¹⁶ NOKO 1 号は品種開発段階の仮名。品種登録承認後は「さくら福姫」となる予定。

¹⁷ NOKO 1 号を晩生の超多収米品種と誤解していたことが判明した。標高の高さや有機栽培である点を考慮すれば、7俵/10aは低い単収水準ではないと考えられる。



【図 3-25】 コメ袋に収められた NOKO1号



【図 3-26】 大野さんの精米機

曾根君と平塚君のブドウ収穫作業のフォローアップを兼ね「夢ワイン」を再訪した際、コロナ禍で派遣延期となり国内待機中の海外青年協力隊員の方と同席することになり¹⁸、「関係人口」論について意見を交換した。JICA 関係者と久しぶりに話ができる機会を与えていただき、良い刺激になった。かつての稚蚕保管施設を再利用したワイン貯蔵庫の調査の際に、草に埋もれた炭窯を発見した。針道の活性化に里山利用は避けて通れない課題である。「夢ワイン」の思いとは「同床異夢」かもしれないが、エコ・カフェ秋川は、また一つ新たなシーズを見つけることができた。【図 3-27】、【図 3-28】、【図 3-29】、【図 3-30】



【図 3-27】 ブドウを絞る搾汁機



【図 3-28】 発酵槽のラインアップ



【図 3-29】 「夢ワイン」の入り口付近の炭窯



【図 3-30】 除草すれば再稼働可能な炭窯

¹⁸ 二本松市には派遣前の協力隊員向けの JICA 研修施設がある。

(5) 第5回の訪問 (2020年11月15日～16日)

①霞ヶ城「菊花展」と市立図書館

二本松市立図書館で針道の関連資料を調査し、司書の方に該当箇所を複写していただいた。資料閲覧中に旧東和町の木幡、太田、戸沢の各地区と比べ針道の資料が極めて少ない点に気付いた。明治から昭和期の大火事によって貴重な文献や資料が失われたことがその理由と考えられる。だからこそ、埋もれた史跡や口伝等の非文字資料を調査し、日常生活の中に潜んでいる文化を掘り起こすことが大切ではないかと考えた。そんな思いから、コロナ禍で自粛した「菊人形展」に代わって開催された「菊花展」を見学し、霞ヶ城内を踏査した。県立自然公園に指定された霞ヶ城は山全体の地形や環境と巧みに調和した城跡等が点在し、山林保全型公共施設の先進事例として参考になる。【図 3-31】、【図 3-32】



【図 3-31】「菊花展」の入口(霞ヶ城)



【図 3-32】霞ヶ城の天守閣跡

②農家民宿「山里の家」と「蛇石」

過去2年の大学生事業の宿舎にさせていただいた「山里の家」の今井知子さん(宿主)に参加学生の進路報告を行った。Uターンした孫夫妻に曾孫が誕生し、今年度の受け入れは困難である点を改めて説明いただいた。また、今井俊介さん(長男)に案内していただき、「夏無沼」大蛇伝説との関係が推測される「蛇石」を視察した。「水」を象徴する「蛇」から、冷害による壊滅的被害を受けた天明の飢饉後に入植した今井家と治水事業との関係が推測される。「蛇石」は、冷害や早魃による飢饉の発生をもたらす天水依存の稲作から、それを克服しうる水管理を可能にした灌漑稲作への転換を記念するモニュメントと推測されるが、その制作意図や設置に関する究明は今後の課題である。【図 3-39】、【図 3-40】



【図 3-39】手前の不整形の石が「蛇石」



【図 3-40】蛇石(龍石) 水神様の宿る石
出典は「魚津たびナビ」

武藤洋平さん夫妻が経営する農家レストラン・農家民宿「東和季の子工房」で自家製のナメコ¹⁹を利用したピザづくりとナメコ栽培施設の見学をさせていただいた。洋平さんは東京の飲食店で修業した後、Uターンしてパティシエの資格も取得し²⁰、自宅を改装したおしゃれな農家レストランを開店した。開店後に東日本大震災が起き、農家レストランの営業も一時は苦境に立たされたのだが、被災者の受け入れを機に農家民宿も併設してしまう洋平さんはジャニーズ系のイケメンだが、メンタルのしなやかな強靭さには「半端ない」モノが感じられた。また、「ナメコをピザの上のせる」という大胆な発想に驚かされたが、実際に食べた時の相性の良さに再び驚かされた。自然豊かな景観の中で味わう美味しい本格フレンチから、エネコ・アチャの「アスルメンディ²¹」が想起された。【図 3-41】、【図 3-42】、【図 3-43】、【図 3-44】、【図 3-45】、【図 3-46】、【図 3-47】



【図 3-41】「季の子工房」のレストラン



【図 3-42】 ナメコのセピザ手作り体験(焼く前)



【図 3-43】 手作り体験の成果品(焼いた後)



【図 3-44】 羽山りんごが載った食後のデザート
(武藤さんはパティシエの資格を持つ)

¹⁹ 武藤さんはナメコの空調栽培農家であり、道の駅や地元スーパーなどへの出荷のほか、給食用食材として地元の小学校に搬入している。

²⁰ Uターン前は「非居住地域維持型」関係人口であったと考えられる。

²¹ スペインのバスク地方に立地し、地域の農家と協力しながら絶滅危機種の保全活動に取り組み、世界で最も持続性が高いレストランに選ばれた“Azurmendi Eneko Atxa Restaurante”。



【図 3-43】菌床ナメコの培養室



【図 3-44】菌床用の容器



【図 3-45】菌床用のオガクズは専門業者から搬入、使用後は土に還る



【図 3-46】KX-N009号(超早生種)の培地仕込みライン((株)キノックスの工場)

新型コロナウイルスによって感染症予防対策と両立しうる経済活動が求められる状況が生まれたが、原発事故による放射能汚染対策を経験した旧東和町には、①健康被害を防ぎ、②経済と心身の健全性を両立させるノウハウが蓄積されている。ナメコのセピザづくりを体験すれば、林業、醸造業、菌類研究所等と連携しながら、消費者の健康に配慮したナメコの空調栽培工程を創り上げてきた「東和季の子工房」の創業者で「道の駅ふくしま東和」や「ふるさとづくり協議会」の理事長を務めた武藤一夫さん（洋平さんの父）が「君の自立 ぼくの自立がふるさとの自立」と提起した言葉の意味が理解できるだろう。【図 3-46】

都市農村交流としての農村発「関係人口」のベクトルが都市に向けられることは自明であるが、武藤さんが提起したように、そのベクトルの方向は地域内の住民（内部関係人口）にも向けられ、そこに価値創造の原動力を見出すべきであると考えられる。作野[2019]の再定義による住民生活を重視する「非居住地域維持型」関係人口とは農村居住者が自らの存在意義や誇りを堅持することによって広がっていく存在ではないだろうか。



【図 3-46】 東北食農連携ネット:「知恵と工夫と住民力で中山間地域農業の未来を切り開く
ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会の挑戦」 <http://www.tohoku-hightech.jp/>

農産物加工の分野に話しを変えよう。二本松には日本酒の海外輸出を見据えて「ワイングラスで飲む新しい日本酒」を開拓する「人気酒造²²」の酒蔵がある。その酒蔵で佐藤隆さん（営業本部長）に蔵内を案内いただきながら醸造工程の説明を受け、針道の稲作農家が栽培する「NOKO 1号」を原料とする「桜福姫²³」等の地元ブランド酒づくり²⁴による六次産業化という方向の新たなビジネスモデルの可能性について話し合った。

「人気酒造」の経営・販売戦略の基盤に位置づけられるのは、醸造工程を抜本的に見直すことで不合理な難行・苦行²⁵が求められる季節労働を若者が意欲的に働ける周年労働に変えた「働き方改革」と、ニーズに適応して製造ラインをフレキシブルに組み換えることができる少数精鋭の若手蔵人たちによる対応力にあるのではないだろうか²⁶。もちろん、その両者は互いに関係することで高品質を維持する銘柄酒の醸造につながっている。

【図 3-50】、【図 3-51】、【図 3-52】、【図 3-53】、【図 3-54】、【図 3-55】

²² 300年の歴史を持つ「奥の松酒造」から2007年に独立した企業である。

²³ NOKO 1号から醸される大吟醸酒「桜福姫」は2019年7月24日新発売。

²⁴ 人気酒造はホンダ主催のF1レースのスポンサー企業としてシャンパン・ファイト(champagne fight)用日本酒や多様な地域特産物の醸造・蒸留に挑戦している。

²⁵ ソロー[1991]「」を想起してほしい。

²⁶ 人気酒造の酒蔵で佐藤本部長の説明を聞きながら、小野[2015]の「坂の途中」の企業活動を想起した。周知のように、(株)坂の途中はJETROの支援（開発輸入企画実証事業）を受けながら、京都の山田製油と連携してウガンダで契約栽培した白ゴマを健康志向の消費者につなぐことで新たな「開発輸入」を創造している。新規就農者への支援からスタートした流通業者がアフリカでのフェアトレードに到る発想は、北欧への日本酒輸出と発酵技術（伝統的文化）を活用した「地産地醸」による地域活性化を両立させる人気酒造と共通すると考えられる。



【図 3-50】 人気酒造「桜福姫」のお披露目
三保恵一 市長(左)と 遊佐勇人社長(右)



【図 3-51】 人気酒造の酒蔵玄関ホール
ホンダの F1 カーと 佐藤隆営業本部長



【図 3-52】 低温(5℃)管理される醗酵室



【図 3-53】 機動性を生む小型蒸留装置



【図 3-54】 瓶内二次発酵の保管状況



【図 3-55】 シャンパン・ファイト用の日本酒

(6) 第6回の訪問 (2020年12月20日~21日)

空理空論に流されることがないように降雪(12/16)中に収穫された葱の出荷調整(皮剥きと段ボール造り)作業体験後、新型コロナウイルスで計画変更を余儀なくされた令和2年度「大学生等による地域づくり支援事業」の活動について報告し、「関係人口」理論に基づく今後の課題と計画について話し合った。討論会では新規就農者の冬期間の収益確保をねらう森林保全や高齢者の生きがい創成を目指す「東和ジンギスカン構想」等について文字通り忌憚のない意見交換が行われ、翌日は森林保全予定地や「アニマルフォレストうつしの森」

(田村市上移 ☞ 「四谷用水」 創建時「普請奉行」宇津志惣兵衛の故郷) を視察し、貴重な体験的情報を得た。【図 3-56】、【図 3-57】、【図 3-58】、【図 3-59】、【図 3-60】、【図 3-61】



【図 3-56】 大野農園のネギ畑



【図 3-57】 ネギの出荷調整作業



【図 3-58】 松尾めん羊牧場(東和 GK イメージ)



【図 3-59】 アニマルフォレストの看板



【図 3-60】 アニマルフォレストの畜舎



【図 3-61】 アニマルフォレストのステージ

(7) 大学生事業活動報告会 (中止)

伝統的祭祀「あばれ山車」とアニメ・キャラの融合を図ってきた「後東若連」の独創的感性に、「香野姫」「白猪」「護王神社」をプラスした SATOYAMA 活用型聖俗習合²⁷による生態系保全を学ぶ「針道キャンパス」に関する報告の準備を進めた。それは、昨年度までの活動成果をふまえながら多様な生命体と里山「口太山」(山麓の遊休農地を含む)を現代的

²⁷ 「「文明」のグローバル化と「文化」の国際化」(藺田[2005], p.17) による経済成長と地球環境問題の深刻化の同時併進に対置しうる針道地域固有の精神的風土に根づいたコンセプトである。

視点から活用する²⁸食農に基づく「生物多様性保全」(Agro-Foods and Lives Forestry) 構想である。なお、当該構想における象徴的動物である羊は人類史と共に存在する家畜であり[クルサード, 2020], 針道において原発事故前まで実際に経済規模の飼養がなされていた家畜である。しかし、2021年1月8日に首都圏を対象とする「新型コロナウイルス感染症緊急事態宣言」がなされ、2月6日に予定されていた報告会は残念ながら中止された。

4. まとめ

針道九区集落での従来の活動が困難となったため、「関係人口」論の先行研究を整理し、「地域」の対象地に二本松・東和地域経済圏を選択し、アルコールツーリズムを展開する東和地区で地元産葡萄(ヤマ・ソーヴィニヨン)を使用する「ふくしま農家の夢ワイン」、地元酒米「NOKO1号」を使用する「人気酒造」(「奥の松酒造」分社化)を調査対象にした。また、多くの新規就農者を育てた「大野農園」、宿泊型農家レストラン「東和季の子工房」、沖縄出身者が運営する農家民宿「ゆんた」に宿泊し、関係人口論について議論を交わした。さらに、原発事故以前まで綿羊を飼育していた針道九区集落の新たな地域振興策として生命にあふれるフードシステムに基づく「生物多様性保全」(Agro-Foods and Lives Forestry) 構想(旧「東和ジンギスカン構想」)の先行事例である「アニマルフォレストうつしの森(生きものたちが響き合う森の舞台)」をコミュニティ・ビジネスのモデルとして視察・調査した。

以上の方法から針道九区の地域づくりにおける関係人口論の有効性を確認するとともに、豊かな自然環境の活用によって明治・大正期に養蚕・生糸ビジネスを牽引した針道に適合的なビジネスモデルを提案した。しかし、自然資本を優先する生産者と食文化や健康を重視する消費者の交流および交流の場(新たなコモンズ)の維持・管理の必要性を痛感した。針道九区においては、生態系サービスの源泉としての生物多様性保全に配慮しつつ、他地域にはない在来種である固有種としての土地利用体系を継承しつつ、地域の精神的風土に根ざしたビジネスモデルを関係人口の内部化によって復活すべきであると考えられる。

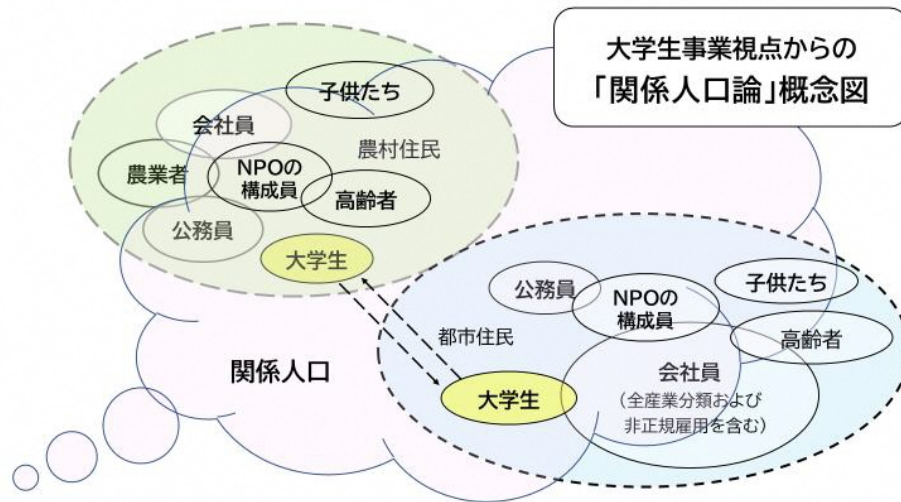
補1. ビジネスモデルについて

生活者の暮らしを重視する「関係人口論」に基づけば、針道九区に求められるビジネスは集落内における生活者の生きがいに価値を見出すことで内部化を実現し、そこに共感する集落内外の人々(生活者)と結びつくことによって経済活動として成立すると考えられる。

その考え方(価値観)は、私たちエコ・カフェ萩川のメンバーが針道九区集落で大学生事業の活動をさせていただき過程で実感した住民の方々の価値観と重なるものであった。集落の鎮守である諏訪神社の例大祭として継承されている「針道のあばれ山車」はそれを象徴する文化の一つであると考えられる。住民は異なる生活環境の下で暮らしているが、「あばれ山車」の季節になると、他出した若連メンバーも帰省して山車の制作に取り組み、祭祀当日を迎える。また、そのようにして醸成される緊密な人間関係によって集落という地域組織を持続する住民のエンパワーメントが住民自身の手によって構築されていく。

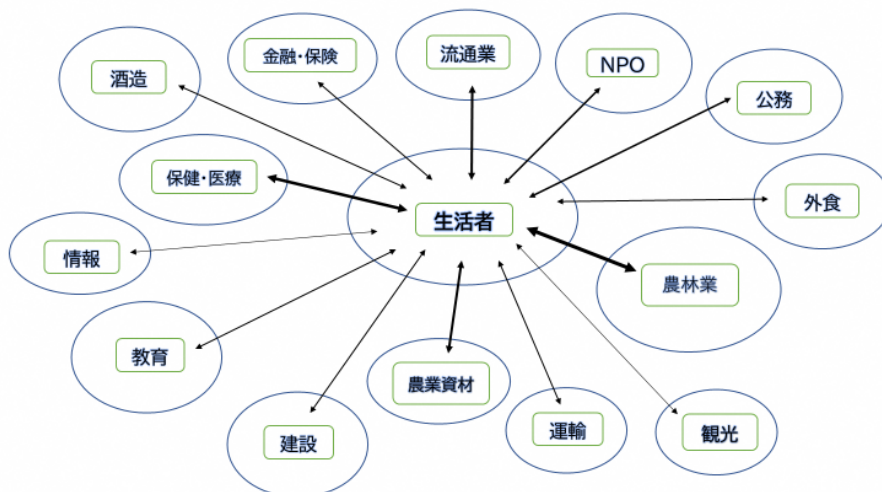
²⁸ 「山開き」共催など「口太山」を共有地(コモンズ)として共同管理する針道(二本松市)と大綱木(川俣町)の関係性を構想の射程に収めたい。

「あばれ山車」という若者たちの爆発的なパフォーマンス（エネルギーの発現）は集落機能が健全に維持されていることを山車の担い手と、それを見守る観衆とが相互に確認し合う儀式ともいえると考えられる。それは、集落に暮らす住民自身にとっては自明のものであり、言上げすべき対象ではないのであろう。しかし、それを目の当たりにした外部者はその臨場感から多くのことを体験的に学び、集落にかかわりたいと感じるのではないだろうか。ここで敢えてその関係性を示せば、以下のようにになると考えられる。



また、「関係人口」としての役割が期待される生活者はさまざまな組織との関係を維持・発展させることによって各々の経済活動を実現しうる。

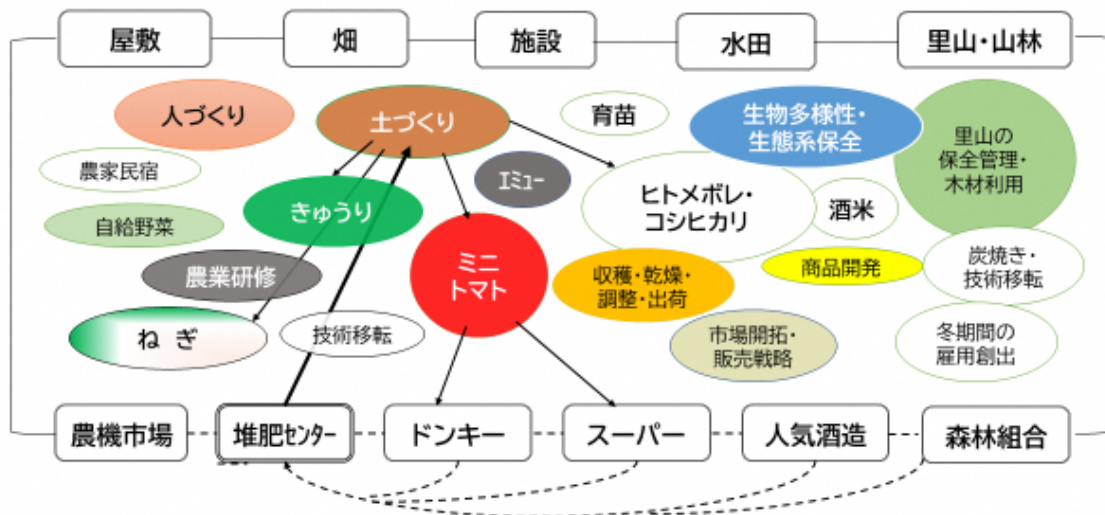
「関係人口論」に基づくビジネスモデル概念図



例えば、米と野菜（露地キュウリ・ネギ，ハウスミニトマトを基幹作物とし，林業や農家民宿を組み合わせた複合経営を展開する大野農園のモデルは以下のように示すことができる。すなわち，堆肥センター，中古農機，びっくりドンキー，地元スーパー，ゆうきの里東和，人気酒造，二本松市，森林組合等との関係性の中で自立的家族経営を成立させ，新規就農者

への技術移転を実現している同農園はコミュニティ・ビジネスの典型と考えられる。また、環境保全や物質循環を重視する当該モデルに着目した関係性は米と野菜の高収量やハウスの連作を支える土づくり資源となる資材は、出荷先である外食、流通、酒造業等と結びつくことによって地域循環＝地域複合的ビジネスモデルへと進化していくと考えられる。

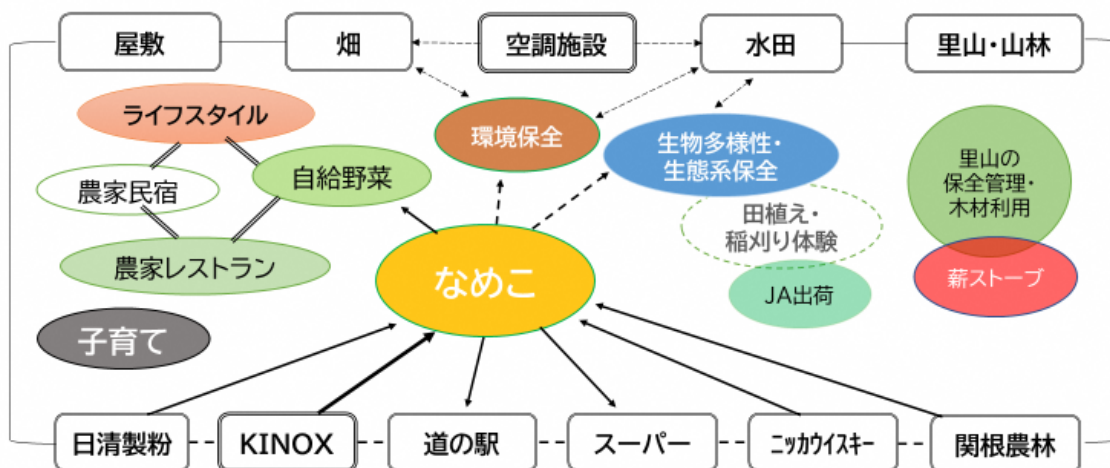
大野農園(域内完結)型ビジネスモデルの概念図



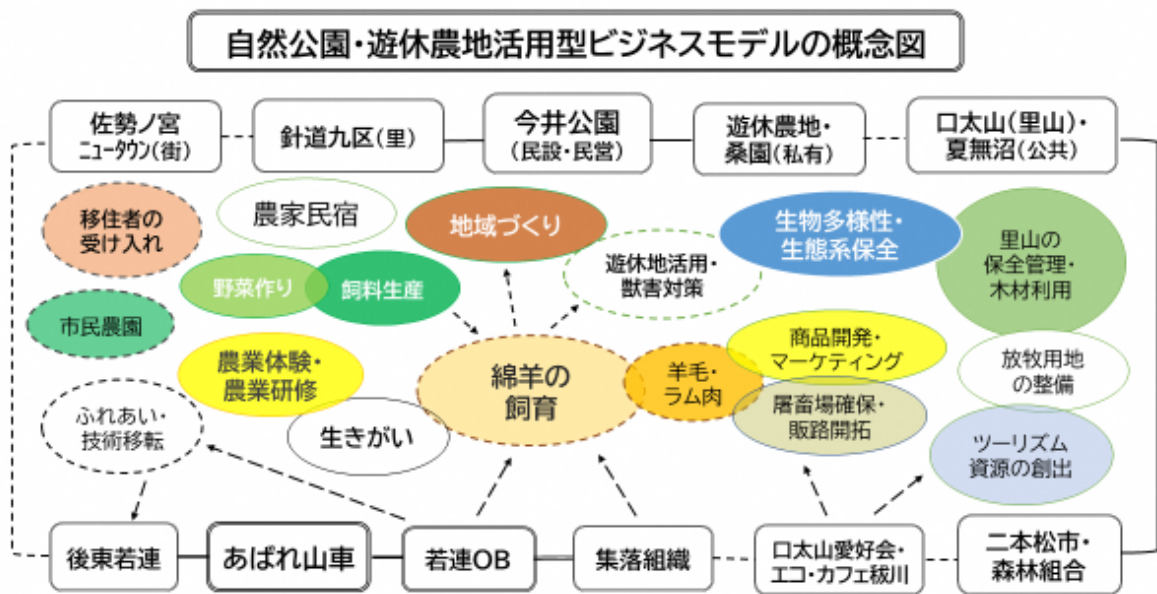
また、ナメコ空調栽培をベースとする「季の子工房」のビジネスモデルは以下のように考えられる。ナメコの空調栽培という特徴から資材の一部を外部に依存せざるを得ないが、それによって他産業との関係性を維持する構造が成立している。

当該モデルは外食部門や子育てを優先する価値観に基づいて物質循環の領域を広域化し、優先部門への労働投下量を確保している点で合理的な選択であると考えられる。

季の子工房(広域連携)型ビジネスモデルの概念図



上記に示した両モデルは、地域内における特定の農業経営モデルの概念図にすぎない。東和地域の現状を考えると、兼業農家や自給的農家あるいは趣味的に楽しむ農業形態など、むしろその多様性が地域的な特質であると考えられる。そのような意味から、閉鎖空間で営まれる畜産業の限界を補完しつつ、遊休資源の活用や獣害対策としての役割を担うことによって地域コミュニティへの貢献が期待される綿羊放牧モデル（原発事故前に実在した経営モデルに基づく）を提案したい。以下に示したように、要素や関係性が未確立または不明な状態を示す破線部分が多い。その具現化（実線化）に寄与することが大学生事業に参加するエコ・カフェ萩川に与えられた使命であると考えられる。



引用文献

- [1] 大江正章 [2008] 地域のカー食・農・まちづくり, 岩波書店.
- [2] 小野邦彦 [2015] 「新規就農者とめざす持続可能な農業」, 益貴大, 小野邦彦, 藤野直人『社会起業家が〈農〉を変える—生産と消費をつなぐ新たなビジネス—』, ミネルヴァ書房.
- [3] 環境省自然環境局編 [2013] 生物多様性国家戦略 2012-2020—豊かな自然共生社会の実現に向けたロードマップ—, 環境省.
- [4] クルサード, S., 森夏樹訳 [2020] 羊の人類史, 青土社.
- [5] 作野広和 [2019] 人口減少社会における関係人口の意義と可能性, 経済地理学年報 65, pp.10-28.
- [6] 指出一正 [2016] ぼくらは地方で幸せを見つける—ソトコト流ローカル再生論—, ポプラ社.
- [7] 総務省 [2017] これからの移住・交流施設のあり方に関する検討会中間報告とりまとめ』
- [8] 藪田稔 [2005] 文化としての神道—続・誰でも神道—, 弘文堂.
- [9] 武内和彦, 渡辺綱男編 [2014] 日本の自然環境政策—自然共生社会をつくる—, 東京大学出版会.
- [10] 高橋博之 [2016] 都市と地方をかきまぜる—「食べる通信」の奇跡—, 光文社.
- [11] 田中輝美 [2017] 関係人口をつくる—定住でも交流でもないローカルイノベーション—, 木楽舎.

- [12] 徳永光俊 [1996] 日本農法の水脈—作りまわしと作りならし, 農山漁村文化協会.
- [13] 萩川信弘 [2020a] 起業家精神と大学生事業—針道集落における事例的研究から—, 総合政策論集, Vol.19, No.1, pp.175-208
- [14] 萩川信弘 [2020b] 祭祀の含意と食農・環境教育—「共同体」の持続性と「直耕」—, 総合政策論集, Vol.19, No.1, pp.33-48
- [15] フィッツモーリス, C. J., ガロー, B. J. 著, 村田武, ジュソーム, R. A. Jr 監訳 [2018] 現代アメリカの有機農業とその将来: ニューイングランドの小規模農場, 筑波書房. (Connor J6. Fitzmaurice, Brian J. Gareau [2016] “Organic Futures: Struggling for Sustainability on the Small Farm”, Yale Univ. Press) .
- [16] 村上 毅 [2007] 我が国の蚕糸業の歴史と近代化過程における役割, 繊維学会誌 (繊維と工業), Vol.63, No.8, pp.209-212.
- [17] 横石知二 [2007] そうだ, 葉っぱを売ろう!, ソフトバンク クリエイティブ.
- [18] 横石知二 [2009] 生涯現役社会のつくり方, ソフトバンク クリエイティブ.
- [19] 鷺谷いづみ [2010] 生物多様性入門, 岩波書店.
- [20] 「アニマルフォレストうつしの森」 <http://animalforest-utsushi.com/> (2020年12月27日閲覧)
- [21] 「いろどり」 <https://www.irodori.co.jp/> (2020年9月4日閲覧)
- [22] 「魚津たびナビ」 <https://uozu-kanko.jp/> (2020年11月16日閲覧)
- [23] 「上勝町」 <http://www.kamikatsu.jp/> (2020年10月10日閲覧)
- [24] 「キノックス」 <http://www.kinokkusu.co.jp/kaisha/kaisha.html> (2020年1月8日閲覧)
- [25] 「総務省」 <https://www.soumu.go.jp/kankeijinkou/about/index.html> (2020年12月21日閲覧).
- [26] 「東北食農連携ネット」 <http://www.tohoku-hightech.jp/file/> (2020年11月28日閲覧)
- [27] 「東和季の子工房」 <http://www.kinokokoubou.com/> (2020年10月12日閲覧)
- [28] 「人気酒造」 <http://www.ninki.co.jp/company.html> (2020年10月16日閲覧)
- [29] 「農家民宿に泊まるツーリング」 <https://www.youtube.com/> (2020年9月26日閲覧).
- [30] 「針道若連連合会公式サイト」 <https://j-fett.wixsite.com/> (2020年12月10日閲覧)
- [31] 「福島県」 <https://www.pref.fukushima.lg.jp/> (2020年8月29日閲覧)
- [32] 「松尾めん羊牧場」 <https://www.matsuo-sheep-farm.jp/> (2020年12月1日閲覧)
- [33] 「マルカリんご園」 <https://hayamaringo.com/> (2020年10月14日閲覧)
- [34] 「ゆうきの里東和ふるさとづくり協議会の挑戦」 <http://www.tohoku-hightech.jp/> (2020年12月4日閲覧)
- [35] “Azurmendi Eneko Atxa Restaurante” <https://azurmendi.restaurant/ja/> (2020年11月28日閲覧)